

第101号

研究所報

三好教育研究所

令和2（2020）年度

ご あ い さ つ

三好教育研究所は、昭和41年三好郡教育研究所として設立されて以来、半世紀あまりに渡り、三好教育会や郡市内幼小中学校と共に、三好郡市教育進展のために歩んでまいりました。小学校新学習指導要領全面実施となった本年度においても、「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメントの充実」「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」など、新学習指導要領が示す方向性に沿った研究・研修活動推進に、各園・各校および関係機関の協力を得ながら取り組んでいく予定でした。

しかしながら今年度は、日本国内はもちろん、全世界が、政治、経済、医療等あらゆる分野において、新型コロナウイルス感染症の猛威にさらされ、翻弄された1年となりました。教育分野においても、緊急事態宣言に基づく臨時休校措置、3密回避の徹底、マスク着用・手指消毒など、何かと不自由な制限を受けながら、例年とは違った教育活動が展開されました。子どもたちの健康・安全を第一に、全教職員で究極の危機管理に努めながら知恵を出し合い、創意工夫して新しい生活様式を取り入れた教育を推進された各園・各校の先生方のご労苦に、心から敬意を表したいと思います。

また、教職員の研修においても「密」を避けるために、各種研修会や研究大会が軒並み中止となりました。毎年8月、幼小中の先生方を一堂に会して開催している三好教育研究発表会も、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止を余儀なくされました。研究発表担当校・担当者をはじめ、計画準備を進めていただいた方々には大変ご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

一方、今年度研究委嘱させていただいた7名の先生方には、前述のようにいろいろと教育活動に制限がかかる中にも関わらず、研究主題・テーマに沿った教育実践を展開して、その成果をご報告いただきました。おまとめていただいた貴重な研究成果は、三好地区各園・各校の先生方にとって、今後の教育実践に大いに役立つものと確信しています。本当にありがとうございました。

今後、学校現場は、「ウイズコロナ」、「ポストコロナ」の時代を見据えながら、様々な面でこれまでの教育活動の在り方を見直し進めていかなければなりません。また、中学校学習指導要領全面実施、GIGAスクール構想、35人学級の導入など、時代の要請に応える教育も展開していかなければなりません。大変厳しい状況ではありますが、三好郡市内幼小中の先生方の英知を結集して、明日を担う子どもたちの豊かで健やかな成長、生き抜く力の育成に共に取り組んでまいりましょう。三好教育研究所も先生方とともに、三好地区の実態や地域の実情、また時代の要請に応じた研究・研修活動に寄与できる研究所でありたいと考えています。

最後になりましたが、これまで本研究所の諸事業に対しまして、関係者の皆様にご指導ご協力をいただきましたことに心よりお礼申し上げますと共に、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をいただけますようよろしくお願いいたします。

令和3年3月
三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

—— 委嘱研究員研究 ——

- 未来へつなぐ幼稚園教育の創造 1
「身近な環境との関わりを通じて、豊かな感性や表現する力を養う」
～身近な人との関わりを通して～
加茂幼稚園 教諭 宮成 典子
- 自然に働きかけ、よりよい生活を創り出そうとする子どもの育成 4
～生活科における「主体的・対話的で深い学び」の授業を目指して～
三庄小学校 教諭 筆本 晴香
- 子どもたちが集団の一員として自己実現をめざす生徒指導 7
～一人ひとりが互いを尊重し、よさを認め合い、共感的な人間関係を育む指導・支援のあり方～
芝生小学校 教諭 徳永 直
- 自らの生活をふり返り、改善できる児童の育成 10
～規則正しい生活習慣定着のために ミニ保健指導を中心とした取組～
箸蔵小学校 養護教諭 高田 寛子
- 話し合い・学び合いの充実で、豊かな表現力の育成 13
～小規模校における「話し合い・学び合い活動」を取り入れた学習指導を通して～
東祖谷小学校 指導教諭 中岡 加代子
- 生徒が、様々な人権課題について主体的に学び、自分の生き方につながる人権教育 16
三好中学校 教諭 大田 悦彰
- 主体的に学習に取り組む態度の育成を目指して 19
～数学科における学び合いの授業を通して～
三野中学校 教諭 入交 理子
- 令和2年度 教育研修・研究事業報告 22
- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～） 24

研究主題

未来へつなぐ幼稚園教育の創造

「身近な環境との関わりを通して、豊かな感性や表現する力を養う」

～身近な自然や人との関わりを通して～

加茂幼稚園 教諭 宮成典子

1 はじめに

本園は、国道192号線に面し、量販店など比較的発展した地域に位置している。周りには畑や田んぼが広がり自然環境には恵まれている。しかし、幼稚園終了後は預かり保育を利用する幼児が大半であり、休日も大型量販店に出かけたり、友達の家に出かけてもゲームなどの室内遊びが多かったりするなど、自然の中で体を動かして遊ぶ機会が少ない。

また、幼児の友達関係や遊びを見ていると、気の合う友達と好きな遊びを楽しんでいるが遊びに持続性がなく次々に遊びを変え遊びの広がりが見られなかったり、戸外遊びにおいても体を動かすことを楽しんでいるが、身近な自然に関わり新たな発見や探求していく体験が少なかったりするようと思われる。

幼稚園教育要領では「豊かな感性は、身近な環境に十分に関わる中で心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること」と示されている。また、豊かな感性や表現する意欲を育むためには、「自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる」とも示されている。そこで、幼児に心動かす出来事に会わせ、表現を楽しむようになるためには保育者がどのような援助や環境構成をしていかなければならないのかを実践を通して考察していきたい。

2 研究の視点

- 身近な環境を通して、豊かな感性を育むための援助について考える。
- 感じたことや考えたことを表現する過程を大切にし、自分なりの表現で楽しむようになるための援助と環境構成について考える。

3 実践事例

(事例1)「わぁ！きれいな色」

6月上旬(5歳児)

園庭にはパンジー、マリーゴールド、サルビアなどの様々な花が咲いている。女兒たちが咲き終わった花を使って色水遊びを楽しんでいる。

必要な用具を選び、まるい電線ドラムの上に並べている。いろいろな花びらをすり鉢ですり、できた色水をペットボトルに入れて見せ合いをしている。「先生、見てみて。こんな色ができた。」とペットボトルを空にかざしているA児。ペットボトルには、水色の色水ができあがっている。それを見ていたB児、C児は「わぁ、きれいな色！」「ソーダー水みたい。その色どうやったら作れるん。」とA児に教えてもらっている。

隣では、D児がマリーゴールドの花で色水づくりをしている。濃い色水を作るために、たくさんの花びらが必要なことやすり方や水加減によ



って色の濃さが違うことがわかり、自分の作りたい色のためにいろいろと試している。

D児が「これ柚子の匂いがする。」と言う。「どれどれ、ほんと柚子の匂い。」と保育者も匂いをかぐと周りにいた子どもたちも「いい匂い。」「ほんと、これ柚子の匂いがするなあ。」「こっちはマンゴーの匂いがする。マンゴージュースじゃ。」とそれぞれの色水の匂いを嗅ぎ始める。B児が「なあなあ、みんなこの色水でジュース屋さんごっこしよう。」と提案すると「じゃあ、もっと作らんとたらんなあ。」とジュース屋さんごっこが始まる。

(省察)

- この時期の園庭には、子どもたちとともに植えた様々な季節の草花が咲いている。みんなと一緒に世話をして育てている花だから大切にしようとする気持ちが、花卉一つ一つを「これいけるかなあ」と友達と確かめながら使う姿から見てとれる。また、保育者は、子どもたちが草花の色や形にも心を留め、自然の美しさや不思議さにも気付いていけるようにと栽培する植物の構成を行い、子どもたちと一緒に関わることを大切にしている。このような積み重ねが感性の芽生えにつながっていくと考える。
- 赤・黄・紫など様々な色からつくり出される思いがけない色は、子どもたちの探求心を揺り動かすものである。花と花の組み合わせ方や入れる量によって、友達とは違う自分だけの色がつくり出される。その色を空にかざし、キラキラと反射する美しさや透明感、思いがけない発見などは、子どもたちの感性を揺さぶるものであると考える。
- 自分の思いや考えを言葉で表現して、それを受け止めてくれる友達に共有され、その場を楽しめる場所に創り出してこうという思いが次への遊びの展開となっていったと考える。

(事例2)「カフェもうすぐオープンです。」

6月上旬(5歳児)

ジュース屋さんは、大きな櫛の下で始めることになった。この場所は、日陰で涼しく、子どもたちがゴザを敷いて、寝転がったり、ごっこ遊びをしたりしている場所である。電線ドラムだけでは狭いため、室内からベンチ付きのテーブルをお客さん用に運んでくる。その間、子どもたちの「なんかカフェみたい。」の言葉に、ジュース屋さんからカフェ屋さんへと変わっていく。

「先生、準備できたらお客さんになってね。」とK児。「いいよ。幼稚園にカフェができるの楽しみ。カフェの名前は。」と保育者が聞くと「名前はカフェ!」と答える。

「看板があるといいかも。」の保育者の言葉に「私が作る。」とN児。「メニューもいるよ。」とS児。教室の中では、画用紙やマーカー、色鉛筆で看板やメニュー作りが始まる。画用紙に「カフェ、おおふん、ぜひきてね。よろしく。」と書き、かわいい女の子の絵も描いている。



隣ではS児、R児たちが画用紙を2つに折り、「オレンジジュース」「マンゴージュース」とジュースの名前を書き、メニューを作っている。メニューには、自分の好きな絵も描き、一人一人違う自分なりのメニューになっている。看板を木の幹に貼るK児。S児は出来上がったメニューをK児に見せ、微笑みあっている。その後すぐに「カフェ、もうすぐオープンで〜す。」と園庭中に聞こえるように知らせていた。

(省察)

- 保育者は、子どもたちのイメージに近づけられるように場所やベンチ付きテーブルなどの環境を一緒に整えていった。この間、子どもとの会話から出てきた「カフェ」というものが具体

的にイメージできるよう、それぞれの思いや考えを受け止め、共有できるように関わった。イメージを共有することでより楽しい遊びとなったと考える。

- 看板やメニュー作りでは、実際に行ったことのあるお店で見たものが作られており「本物らしく」という思いにつながっている。さらに、そこから子どもたちは、メニューにケーキやジュースの絵を入れてみたり、リボンの絵で飾ったりと「自分らしいメニュー」へと変化させ表現を楽しむことができていた。
- S児は、この遊びをたくさんの友達と共有することでもっと楽しいものになるだろうと思いついて園庭の友達にも呼び掛けるという表現方法をとったと考える。

(事例3)「なんで？」

7月上旬(5歳児)

「今日も石鹸でクリーム作りしよう。」とR児を誘うF児。ふわふわのクリームを作るために水や石鹸の量を確認しながら泡立てていく。「見てみて！」と自分たちの作ったクリームを見せ合っている。

F児が「この黄色の色水を入れたら黄色の泡ができるかな。」とペットボトルに入れた色水を少し、泡の中に入れるが、あまり変わらない。色水の入る量を増やすが、泡の色は変わらない。花びらを小さくちぎって入れ、もう一度泡立てたり、濃く作った色水を入れてみたりするが泡に色につかない。R児たちも気になる様子で覗いている。

「すり鉢ですって出来た花の汁をそのまま入れてみたら。」と保育者。すり鉢ですったマリーゴールドの汁を薄めずそのまま、削った石鹸の中に入れ、泡立てるF児。泡立て器の中から黄色の泡がふわふわと生まれてくる。「黄色の泡きれい！」「すごい！」と周りの子どもたちも色付き泡クリームを作り始める。R児がサルビアの赤い汁を泡クリームに入れると化学反応で青い泡クリームに変化した。すると「なんで？」「Fちゃんの泡は黄色のままで変わってないのに。」とびっくりした様子の子どもたち。

(省察)

- F児にとって、十分な時間とその空間を共有し認めてくれる友達や保育者の存在は大きく、失敗を重ねながらもやりぬく力につながっている。
- 色の変化という化学反応は、子どもたちの心動かされる出来事となった。自然の不思議さや面白さは、子どもたちに探求心や好奇心また感動を伝えあう楽しさを育てていくと考える。



4 おわりに

幼児の感性を育むには、心揺さぶられる体験に出会わせ、好奇心や探求心を湧き出させることが大切である。また、十分に取り組める時間や場所、イメージを引き出す道具や素材、そして体験をともに分かち合う友達の存在も大きいと考える。

同じ経験をしていても感じ方は人それぞれであり、表現の仕方も異なる。そのため、教師は幼児一人一人の内面理解に努めることが必要である。教師に受け止めてもらえることで幼児は自信をもって自分なりの表現を楽しむことが出来ると考える。以上のことを踏まえながら教師のなすべき役割についてこれからも考えていきたい。

研究主題

自然に働きかけ、よりよい生活を創り出そうとする子どもの育成 ～生活科における「主体的・対話的で深い学び」の授業を目指して～

三庄小学校 教諭 筆本晴香

1. はじめに

新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすることが示されている。それをうけ、令和元年度県生活科部会研究計画でも「研究内容と方法」の柱の一つとなっている。このことから、昨年度担任した2年生の生活科において「主体的・対話的で深い学び」の授業を目指し、特に自然とかかわる活動について取り組んだ。その実践を報告する。

2. 実践

(1)「主体的な学び」に向けて

①2年間をつなげる工夫 ～学びの連続性～

1年生で飼育していた生き物を2年生でも引き継ぎ、飼育することとした。1年生の時に捕まえたセスジスズメの幼虫やドングリ虫の幼虫、地域の方からいただいたカブトムシの幼虫、そして、1年生の担任が持ってきたメダカとエビである。



一定の期間、継続して飼育・観察を行うことで、対象への愛着が深まるとともに、その変化のおもしろさを感じ、進んで観察する姿が見られた。セスジスズメの幼虫が羽化して成虫となった時は、ガの飼育は難しいことから、学級で子どもたちが話し合い、「ドンちゃん」と名前をつけて、自然に返すことになった。

②人との関わりを大切にしたい取り組みの工夫

ア. 地域の人と

学校の中では見られない動植物を地域や保護者の方が、「学習に使ってほしい」と何度も提供してくださった。モグラやオケラ、カブトムシの幼虫、青カエル、特大松ぼっくり、季節の草花などである。その度、子どもたちは目を輝かせて観察していた。



イ. 博物館の学芸員さんと

徳島県立博物館の学芸員さんをお招きし、様々な生き物について教えていただいたり、標本を見せていただいたりした。講演が終わってからも、自分が飼育している虫を見せながらたくさん質問をする子どももあり、子どもたちにとって素晴らしい経験となった。



③身近な自然を対象にした活動の工夫

学校の中で見つけたヤモリ・ハエ・カ（ボウフラ）なども飼育・観察の対象とした。対象が身近なものであれば、直接体験したり、対象に関わったりすることを繰り返すこ

とができるため、対象への理解を深め、気づきの質を高めることにつながった。

学校菜園で見つけたヤモリグループは餌付けに挑戦した。夜行性であることを調べた子どもが、暗いところでエサを与えれば食べるのではないかと考え、風呂敷をかぶってエサを与え始めた。数日間、継続して暗室での餌やりを続け、野生のヤモリの餌付けに成功した。



(2)「対話的な学び」に向けて

①対象物や友達とのかかわりの中で

ダンゴムシグループは、環境を整えることができずに全滅させてしまい、泣いている子どもまでいた。その際、他のグループの友達が「どんなところで捕まえてきたのか。」「エサは何をあげたらよいか。」など、その子どもに問いかけ、ダンゴムシが死んでしまった原因を一緒に考える場面が見られた。その後、情報を共有しながら試行錯誤を繰り返し、自然に近い飼育環境を整えることで、最終的に繁殖にも成功した。

子どもたちは、友達から問いかけられることによって、自分の体験を丁寧にふり返り、言語化することで、気づきを自覚するようになっていた。

②うちの人を巻きこんだかかわりの中で

カブトムシ（幼虫）グループは、土の種類による成長の違いを調べていた。畑の土の幼虫がだんだん弱くなり、研究を継続するか、命を大切にするか、グループ内で意見の対立があった。そこで、「家族に相談してみたら」と担任からアドバイスをを行った。数日かけて話し合いを続け、ある保護者の方の「どんな事情があっても、自分達の都合で生き物を死なせてはいけないのではないか。」という意見に共感した子どもたちは、畑の土の使用を中止し、広葉樹とクヌギの混合にして研究を続けることにした。



③多様な学習活動と、じっくり取り組める場の工夫

ア. 比べる活動 ～カブトムシの飼育を通して～

カブトムシの卵が孵化する様子や幼虫が羽化するまでの変化を分かりやすく見せるために、生花用のオアシスを用いて幼虫ケースを作った。また、ヘラクレスオオカブトを準備し比較できるようにした。その際、計りや虫眼鏡等の道具をいつでも使えるように配置したり、幼虫を土から自由に出したりできるようにした。



イ. 試す活動 ～メダカの飼育を通して～

メダカは年間を通じて飼育し、孵化から成長、そして次の世代のメダカの繁殖を1年間で観察することができる。飼育方法もたくさんあり、生物そのものが比較的丈夫であるため、色々な方法を子どもが実際に試すことができた。また、様々な種類のメダカを交配させることで、色や形の違う個体が生まれたり、エサによって体色や成長に影響が表れたり、目で見て気づきを高めることができた。

(3) 深い学び【気づきの質の高まり】

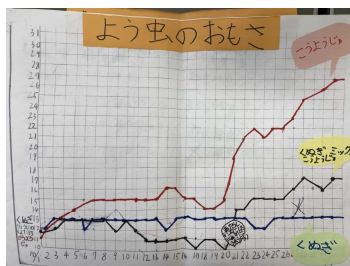
①学級全員、「実験隊」の発足

9月になり、いつからか「ぼくたち実験隊だ」という言葉が、クラス全体で広まった。そして、水溶液、マツボックリ、花、カブトムシ、色水実験チームが発足していった。大テーマ、その中でも小テーマを持って活動を始めた。例えば、「調味料を太陽に当てて温度を調べる実験隊」で、醤油、酢、ごま油、オリーブオイル、天ぷら粉、片栗粉、塩、重曹、砂糖、小麦粉を水に溶かしてペランダに置き、温度の変化を調べる実験を行うチームがあった。



②気づきやまとめる力の高まりと、研究発表会の開催

2月、これまでの実験や研究の成果をまとめ、参観日に発表を行った。説明の仕方を考えたり、図やグラフ、具体物などを用いたり、聞いている人に伝わるように、自分なりの工夫をしていた。



日	おもさ	おもさ	おもさ	おもさ	おもさ	おもさ	おもさ
29.0	29.0	29.0	29.0	29.0	29.0	29.0	29.0
30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0
30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0

3 おわりに

1年生、2年生と担任をした子どもたちは、特にこの1年間で生活科を中心として日々の気づきから問題や課題を見いだすようになっていった。自然や人とかかわることで、自分の思いや考えを深め、課題解決の方法を模索する姿が日々見られるようになった。



3年生になり、理科と社会の学習でも、積極的に活動に取り組んでいるそうである。また、「フィッシュ&サイエンス係」や「生き物クイズを出す会社」を作り、身近な自然や生き物について調べたり、発表したりもしている。家庭では生き物の飼育や栽培を行い、研究を続けている子どももいる。



今回、我が子をよく理解している保護者の意見や思いは、特に、子どもたちが受け入れやすいものであり、子どもが判断に迷っている時には、相談させることがよくあった。多様な考えや価値観に触れて、考えさせることで、ものの見方や考え方を広げ深めることができるからである。また、その対話の中には、保護者が求める子どもの姿や学校教育の在り方があった。子どもを通して保護者の願いを知ることにより、指導や授業改善に生かすことができた。

生活科の学習を通して、楽しみながら夢中で活動に取り組んだ時間や失敗しても諦めずに粘り強く取り組んだ経験が、学習の基盤となり、実生活にも生かされることを願っている。そして今後も、キラキラと目を輝かせた子どもたちの自由な発想や思いを大切にしながら、主体的・対話的で深い学びを実現していきたい。

研究主題

子どもたちが集団の一員として自己実現をめざす生徒指導

～一人ひとりが互いを尊重し、よさを認め合い、共感的な人間関係を育む指導・支援のあり方～

芝生小学校 教諭 徳永 直

1 はじめに

本校は特別支援学級3学級を含め全校9学級、116名の児童が在籍している。保護者や地域は、教育に関心が高く、学校に協力的である。

本校の学校教育目標は、「生き生きと学び、それぞれのよさを発揮し、ともに高め合う子どもの育成—自ら考え、自ら学び、自ら実行できる子どもをめざして—」である。そして「よく学び、よく遊び、よく働き、自ら進んで力一杯がんばる子どもの育成」と「子どもたち一人ひとりが輝き、元気に笑顔で活動できる場づくり」を重点目標とし、この目標の達成に向け、全教職員が一丸となって児童の指導にあたっている。

2 研究の目的

本校の子どもたちは、明るく活発で運動を好み、休み時間には運動場に出て学年にかかわらず仲よく一緒に遊んだり、集会活動では助け合って活動をしたりできている。よく気がつき、清掃や当番活動でも進んで友達を手伝う優しさがある。

しかし、小さい頃から同じ集団で過ごしているので、「〇〇さんは△△が得意。」とか「どうせ〇〇さんだから。」と友達を固定観念で判断してしまったり、決めつけてしまったりすることが多く、トラブルになったときに自分の基準で判断してしまい、解決に時間がかかることがあった。

こうしたことから、相手の言動を自分の固定観念で決めつけるのではなく、相手の話を聞いたり、様々な友達の意見を聞いたりしながら理解することで、相手のよいところを見つけたり、相手の思いを受けとめ認めたりし、新しい人間関係を構築していくことが必要と考え、本研究に取り組んだ。

3 研究の視点と実践

(1) 視点のとらえ方

集団における望ましい人間関係とは、相手を尊重しながら、お互いの思いを伝え合い、協力しながら課題を解決することで育まれると考える。

そこで、集団の中で自分の存在が認められることで安心して自分を出せる雰囲気をつくり、一人ひとりが互いに尊重し、互いのよさを認め合って共感的な人間関係を育むことができるよう、以下の視点で取り組んだ。

- ①望ましい行動があふれる仲間づくり
- ②安心して自分を表現できる雰囲気づくり
- ③共感的な人間関係を育む場づくり

(2) 研究の実際

①望ましい行動があふれる仲間づくり

学校生活の中で、自分を認められることは自尊感情を高め、それにより相手も認めようとする意欲につながっていくものである。そこで、学級集団の中でお互いに認め合い、高めていくために、毎日の帰りの会に「よいこと見つけ」のコーナーを設けた。はじめは、日直のよかったこと、

がんばったことを発表していたが、慣れてくるにつれてクラスみんなのことに言えるようになり、内容の広がりや深まりがみられるようになった。係活動や掃除当番など日常生活の中で「〇〇さんが隅々まで拭いていました。」「〇〇さんがバケツの水を捨てるのを手伝ってくれました。」など、友達のがんばりに次第に目を向けることができるようになっていった。



また、今日一日のめあてを考えさせ、その取り組みや活動を振り返る場面を設けて、互いに評価し合い、よかったこと、がんばったことを見つけることにも取り組んだ。

3学期から、学校全体でポジティブな行動支援の取り組みを始めた。これにより、児童は落ち着いて学習に取り組むことができ、賞賛されることにより自分に自信を持って活動ができるようになっていった。

②安心して自分を表現できる雰囲気づくり

4月当初から、Aさんの行動が気になっていた。Aさんは、興味のあることにはこだわりが強く、友達との距離を保つことが苦手な子であった。そのため、トラブルになりやすく、自分の思いが友達に伝わらないこともあって、だんだん自信をなくしていった。そのAさんが安心して自分が出せる雰囲気を作るために、この子はこうだという決めつけをなくしていく必要性を強く感じた。そのために、一人ひとりにはその人の考え方があって、それを個性としてとらえられるように授業を組み立てた。

どの教科においても、課題に対して多様な意見が出るように導入や発問の工夫をし、考えの違いを認め合いながら解決に向かっていく授業展開をすることで、違いがあるからこそ深い学びができることを実感できるように取り組んだ。

そして、振り返る場面では、一人ひとりのがんばった発言や行動を取り上げ、賞賛することによって、自己存在感を感じさせ、自信を持って活動できるように支援した。

また、学校生活の中で困っている場面を取り上げ、みんなで考え、話し合うことにより、いろんな解決方法があることに気づかせた。また、他人ごとでなく、自分のこととして考えることで傍観者的な立場に立たないように支援した。

その結果、学級の中で積極的に自分の意見を出す児童が増えたり、課題をみんなで考えていこうという意識が生まれたりして、学級が一つにまとまる雰囲気ができてきた。そして、Aさんも少しずつではあるが自分の考えだけで行動するのではなく、相手の考え方を理解しようとする場面が見られるようになってきた。Aさんがトラブルを抱えたときに、声をかけて、そっとそばに寄り添う児童も増えてきた。



③共感的な人間関係を育む場づくり

自分の考え方と違う意見を持つ相手に対して、否定から入るのではなく、いったん受けとめ、認め合うような場面をつくっていった。一つの意見に対してどうすればよりよくなるかをみんなで考

えたり、意見を出し合ったりして練り上げる学習に取り組んだ。また、ペア学習やグループ学習の場面の中で友達と助け合い、協力しながら意見をまとめていく学習にも取り組んだ。その結果、相手の考えを聞いてからその意見に付け足したり、修正したりしながら自分の意見を発表できる児童が増えてきた。

また、ピア・メディエーションの手法を用いて、学級のトラブルを当事者だけの問題とするのではなく、第三者が客観的な見方をすることで双方の言い分がわかり、新しい解決方法を見つけ出すことにも取り組んだ。当事者が友達（メディエーター）に話すことで怒りの感情が収まり、冷静に話せるようになった。そして相手にも自分がどんな気持ちでいるのかを話したり、相手がどんな気持ちだったのかを聞いたりすることでお互いの価値観がわかり、解決の手がかりになった。友達も、両方の考えを聞くことにより、互いの言い分がわかり、それに自分の意見を加えることでよりよい解決の方法を探ることができた。



4 成果と課題

・「よいこと見つけ」を進めていくうちに、友達の今までと違うよいところを見つけることができるようになり、クラスみんなに対しての固定観念が少しずつ変化していった。また、自分が思ってもみないようないいところを見つけてもらえて、自分に自信を持つ児童が増えてきた。また、自分自身で具体的なめあてを決めて達成に向けてがんばることにより、自分のやるべきことが明確になり、振り返りの場面でも正しく評価することができた。

・授業の中で、自分の思いをみんなに伝えることや相手の意見をよく聞いて考えることで、友達の思いも共感的にとらえられるようになり、自分たちの生活場面でも「〇〇さんはこう思っていると思うよ。」などと相手の考えに寄り添う児童が見られた。

・ピア・メディエーションの手法を用いて相手の言い分を聞くことにより、少しずつではあるが、自分を主張するだけでなく、相手のことに興味をもつことで、お互いの価値観に気づき解決の手がかりになった。また、友達も第三者的な立場に立つことで客観的な視点で見ることができるようになってきた。ただ、いつも中立的な立場で判断するのは難しかったようである。

5 おわりに

今回の実践を通して、児童が自ら積極的に考え、相手の気持ちも考えながら行動することによって、一人ひとりの個性を認めつつ、自己存在感を高めることができた。ただ、自分の感情をコントロールできずに担任のサポートを受けたり、相手の気持ちよりも自分の考え方にこだわってしまったりする場面も見られた。

今年度、高学年になったことにより、今まで以上にやる気を見せてがんばる姿が見られた。前年度に比べて、子どもたち一人ひとりの成長が見られるとともに、お互いを認め合った共感的な人間関係を構築しつつある。そして、学校全体を通してポジティブな行動支援に取り組んでいるので、さらに自分に自信を持ってよりよい集団になっていくことを期待している。

研究主題 自らの生活をふり返り，改善できる児童の育成

～規則正しい生活習慣定着のために ミニ保健指導を中心とした取組～

箸蔵小学校 養護教諭 高田 寛子

1 はじめに

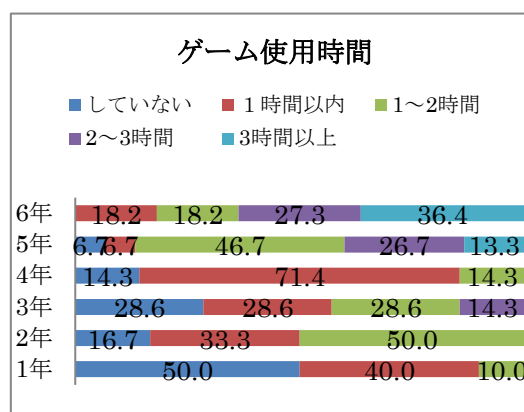
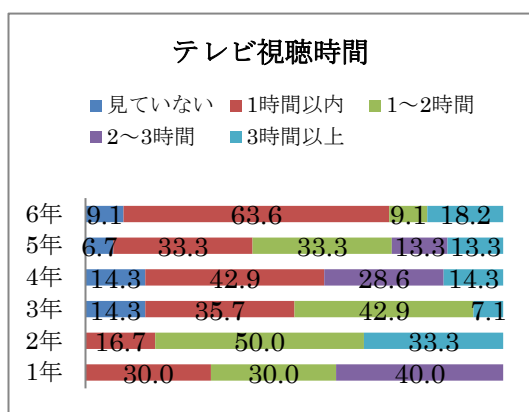
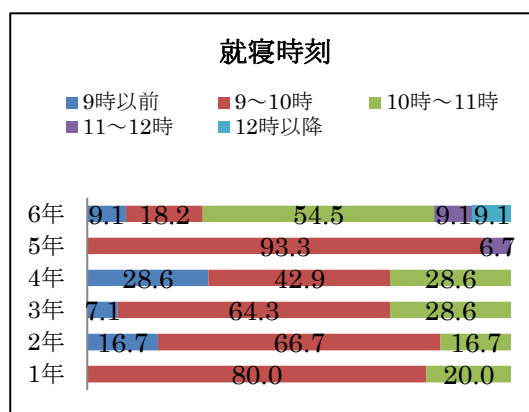
本校は全校児童 61 名の小規模校である。元気で素直な児童が多く，学年の枠を超え，みんな仲良く活動している。近隣には，池田支援学校，池田高校三好校，社会福祉施設などがあり，一年を通して様々な交流を行っている。保護者や地域の方々は学校教育に協力的で，子どもたちは地域の方々に見守られのびのびと生活している。

しかし，日常会話の中や保健室来室状況，学級担任からの話から，子どもたちの就寝時刻が遅いこととメディア利用時間が長いことが気にかかっていた。

2 研究の目的

本校の健康課題を明らかにするために，5月に生活に関するアンケート調査を行った。平日の生活の様子について，「睡眠」「食事」「歯みがき」「メディア」「悩みなど困っていること」の項目について調査した。その結果，やはり就寝時刻の遅さとメディアの利用時間に問題点が見られた。

就寝時刻は，午後 10 時以降の児童が特に 6 年生で多く，テレビ視聴時間は，2 時間以上がどの学年でも多い傾向にある。ゲーム使用時間は，特に 5，6 年生で長い傾向にあった。



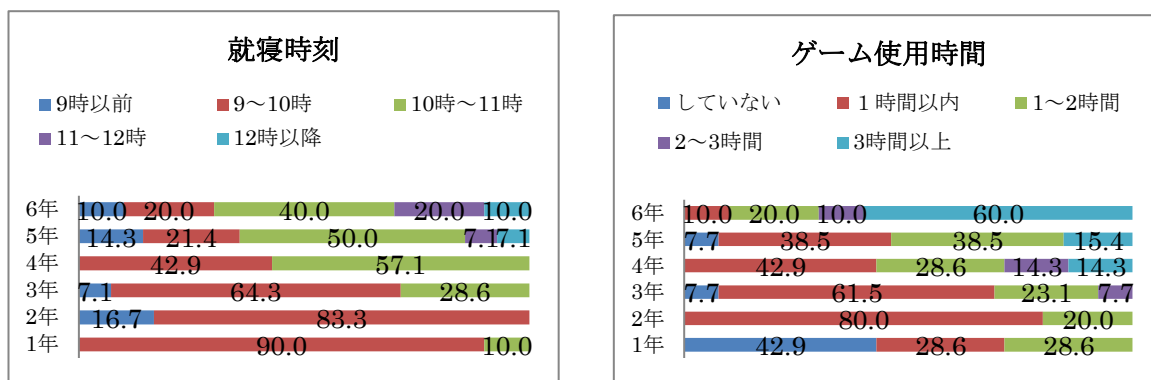
3 研究の方法と実践

(1) ミニ保健指導

本校では，毎月の体重計測時に児童が健康に関する正しい知識を身に付けるためにミニ保健指導を行っている。効果的に実施できるよう，毎月の保健目標や学校行事などに合わせて実施計画を作成し，発達段階に応じた指導をしている。毎月の指導内容に関連づけて必ず食事，睡眠，運動について触れるようにし，児童が自分の生活を振り返られるように声かけをしている。ミニ保健指導実施後，児童

4 結果と考察

2学期のアンケートの結果、就寝時刻は、午後10時までで就寝する児童が1、2年生で増加した。しかし、高学年では午後11時以降に就寝する児童が増加し、高学年全体の10%程度が午前0時以降の就寝になっていた。ゲーム使用時間は、2、3年生で改善されていたが、4年生と6年生で長時間化されていた。特に、6年生では60%が3時間以上使用しているという結果だった。原因として、元々の長時間のメディア利用を急に短くすることや今までの生活習慣を突然変えることは難しいことが考えられる。今年度は新型コロナウイルスの影響により室内で長時間過ごすことが多かったことも原因と考えられる。また、就寝時刻が遅い児童の中には、メディアの長時間使用が原因となっている児童もあり、今後はメディアの長時間使用の影響や利用の仕方、メディア以外の過ごし方について指導が必要だと感じた。ミニ保健指導やほけんだよりでの啓発だけでなく、外部講師を招いた授業や講演を行ったり、児童保健委員会から呼びかけたりしたい。



ミニ保健指導では、年間計画を立て毎月実施することで、児童が興味関心を持つことができ、知識の定着につながった。また、ワークシートを家庭で確認してもらうことで、家庭の協力も得られ、特に低学年では生活の改善にもつながっている。保護者の記入からも、児童の家庭での様子や気になっていることがわかり、担任と連携して対応することができたケースもあった。しかし、学年によって取り組み方に差があるため、今後、校内での協力体制を整えたい。また、児童が興味関心を持てるよう、ミニ保健指導の指導方法やワークシートの改善と工夫を図りたい。

生活習慣に関する授業では、自分の生活を振り返り、改善点を見つけた児童もいたが、今現在、体に影響が出ていないことから予防や改善の必要を感じていない児童もいた。将来の健康な体は今の生活習慣が作るということを機会を捉えて継続的に指導していきたい。

5 おわりに

今年度の取組から、基本的な生活習慣の定着には、まずは児童自らが課題に気づくことが大切だと感じた。しかし、課題に気づいてもなかなか改善に移せない児童も多く、周囲の協力も欠かせないと感じた。周囲の協力を得ながら児童が自らの課題に気づき改善していくために、ミニ保健指導を通じた継続的な家庭への啓発や学級担任をはじめ様々な職種の方々との連携により、子どもたちが興味関心を持って健康教育を受けられる環境を整えたい。そして、私自身が日々の研鑽に努め専門性を高め、子どもたちに健康に関する知識を繰り返し伝えていきたい。今後も自らの生活を振り返り、課題に気づき、改善していける児童の育成に取り組んでいきたい。

参考文献

保健指導おたすけパワーポイントブック《小学校編》1・2・3／少年写真新聞社
健康教室 2020年10月号／東山書房

研究主題

話し合い・学び合いの充実で、豊かな表現力の育成
 ～小規模校における「話し合い・学び合い活動」を取り入れた学習指導を通して～

東祖谷小学校 指導教諭 中岡 加代子

1 はじめに

本校は、東祖谷小学校として開校し、9年目を迎える。木のぬくもりに包まれた小中一体型の校舎で小学生14名と中学生18名が一緒に学校生活を送っている。開校時より小中連携教育をスタートさせ、普段の生活において「児童と生徒同士」「児童と中学校教師」「生徒と小学校教師」「小中教職員同士」が、自然に挨拶を交わし声を掛け合う関係が築けている。また「乗り入れ授業」「小中合同研修」「小中合同行事や集会活動」などを計画的に実施し、「9年間の学びと育ちをつなぐ教育」を推進している。

2 研究の目的

児童数が年々減少し、開校時、45名いた児童が本年度は14名となり、各学年1名から5名の少人数学級になった。各学年におけるペア・グループ学習の実施が困難となり、活発な話し合い活動ができないのが現状である。また、児童の実態として課題に一生懸命に取り組もうとする態度は身につけているが、自ら進んで課題に取り組んだり主体的に学び合ったりすることに課題が見られる。そこで、本年度は、これまでの合同学習の組み合わせを見直し、下学年、上学年、全校で、話し合いや学び合いの場を取り入れた授業や集会活動を実施していくことにした。話し合いや学び合い活動を充実させていくことで、「積極的に人と関わり、自分の考えを豊かに表現する力が育成できる。」と考え、本研究の目的とした。

3 研究の方法と実践

(1) 話し合い・学び合い活動を充実させるための学校全体での取り組み

① 「話し方・聞き方」の定着

学び合いを支える基礎的な力である「話す力」「聞く力」をしっかりと身につけるために、各学級に掲示している「話す・聞く名人レベル表」を意識しながら、学年にふさわしい「話し方」「聞き方」を身につけていく。

はなしかた	レベル	ききかた
子どもたちのいけんに つなげて	5	じぶんの かんがえと くらべながら
じゆんじよく りゆうを いれて	5	だいじなことを おとさないで
こえの 大きさを かんがえて	4	おわりまで しつかりと
おわりまで はっきりと	3	うなずいたり べんごしてしたりして
みんなの ほづを見て	2	はなしを している人を見て
まっすぐに 手をあげて	1	よいしせいで

(低学年用)

話し方	レベル	聞き方
考えが伝わるように	5	ききようつう点やちがいを 考えながら
理由を入れながら	5	話をのぞきながら
すじ道をたてて	4	話のよう点を考えながら
話す内容を整理して	4	話の内容に関心をもって
相手-目的-場におうた言葉づかいで	3	話のしゆんじよくや 組み立て方を意識しながら
声の強弱	2	終わりで しつかりと
聞の取り方を考えて	2	よいしせいで
正しいしせいで	1	相手の表情を見て

(中学年用)

話し方	レベル	聞き方
話したいことが伝わるように	5	相手の意図をどらえながら
知識や情報を入れて	5	自分の考えをまとめながら
理由や根拠をはっきりさせて	4	要点を落とさないで
相手の反応を見ながら	3	内容を確かめながら
立場をはっきりさせて	2	反応を返しながら
場に応じた言葉づかいで	1	相手の表情を見て

(高学年用)

② 「学習（グループ）リーダー」の育成

自主的・主体的な学習態度を身につけ、話し合い活動を充実させることを目的に各教科で「学習リーダー」を育成していく。グループ活動や全体学習における話し合いでは、学習リーダーが中心となって話し合いを進めていけるようにする。

③ 「話し合いの手順」や「話し方の話型」の提示

児童が主体的に話し合いを進めていくために、「話し合いの約束」「話し合いの手順」「話し方カード」を提示し、話し合いの仕方を身につけていく。

ようにした。「話し合い活動（こんな言い方がいいね！シール）」を用意し、できたことをしっかりと褒めて、振り返りカードに「できたシール」を貼るようにした。次の話し合いに向けて「自分のめあて」をもって、みんなで協力して話し合い活動に取り組めるようになった。

④全校人権学習

毎年、全校人権集会や小中合同人権集会を実施している。本年度は、第1回「認め合い支え合う仲間づくり」、第2回「自分も友だちも大切に」を主題に



全校人権学習を実施した。いやっこ班（異学年の縦割り班）に分かれて、6年生がグループリーダーとなり話し合いやロールプレイなどの場を設定して、全校で学び合った。全校学習になると発言することに勇気がいるが、グループリーダーの学年差を考えた話し方により、温かい雰囲気を感じて自分の意見をしっかりと述べることができていた。

⑤いやっこタイム

本年度から、各学年が学習したことを全校の前で発表する場「いやっこタイム」を朝の活動で実施している。人前での発表に自信をもたせるとともに、相手を意識した話し方や聞き方を全校で学ぶことができている。低学年は、全校学習になると緊張してしまい、発言が消極的になってしまうという課題から下学年と上学年のペアで「会話タイム」も実施した。学習したことを自信をもって発表したり感想を伝え合ったりしている姿から「話す力」「聞く力」が確実に身につけてきたことを実感している。



4 成果と課題

〈成果〉

- ・合同学習の組み合わせを見直したことで、グループ学習が可能となり、多様な意見に触れることができるようになった。また、発表や話し合いの場を経験していく取り組みを継続していくことで、表現力が身に付き、自信をもって発表する児童が増えてきた。
- ・「話し合いの進め方カード」や「話型」「学習の流れ」の提示により、見通しをもって自主的に考えて活動することができるようになってきた。

〈課題〉

- ・話し合い・学び合いの場を今後も継続して経験させ、児童主体で話し合いを深めていけるように学年にふさわしいリーダーを育てていく必要がある。
- ・話し合いや学び合いにおける「めあてのめあせ方」や「振り返りの仕方」についてさらに研修し、それぞれの学年で身に付けた力を次の学年へ積み上げていけるようにする。

5 おわりに

次年度以降もますます児童数が減少していく。児童の実態や課題にしっかりと向き合い、「豊かな表現力を高める実践」を今後も学校全体で取り組んでいきたい。

研究主題

生徒が、様々な人権課題について主体的に学び、自分の生き方につながる人権教育

三好中学校 教諭 大田 悦彰

1 はじめに

本校は、生徒118名、教職員21名の小規模校であり、学級数は知的・情緒・病弱の支援学級3クラスと各学年2クラスの9クラスから成っている。全校あげて、校訓「清明」のもと、生徒一人一人の幸せを願い、「人の心の痛みがわかり、自分のことが好きだ」と実感できるような共感的理解のできる自己有用感の高い生徒の育成に努めている。

生徒は主に旧町内の2小学校から入学してくる。全般に明るく素直・活動的である。近年は、学校内外で気持ちのよいあいさつができる生徒が増えつつある。また、生徒会活動や部活動も生徒中心に意欲的に取り組める場面が増えている。長年にわたり、人権教育に重きを置いた実践の成果も表れ、学年が上がるにつれ、自らの生き方を問う生徒も育っている。

しかし、一人一人の生徒に目をやると、不登校傾向のある生徒や低学力の問題など、特別な支援を必要とする生徒も少なくない。基本的な生活習慣が定着しにくい家庭環境に置かれて、コミュニケーション能力が低かったり、不安感があり集団になじみにくかったりする生徒も若干名いる。

2 研究の目的

本県において、人権学習は長らく部落問題学習を中心とし、「私の願い」や各校区において築かれてきた部落問題の教材を用いて行われてきた。平成14年（2002年）の特別措置法の期限切れ後、3月に「人権教育・啓発に関する基本計画」策定され、総合的な人権教育が進められることになった。しかし、部落問題学習への取組が弱まり、『部抜き、差抜き』という批判もある。

さらに、平成31年度（2019年）から特別の教科「道徳」が全面実施された。これにより「道徳」の時間を今までのような人権学習に用いることは、道徳のねらいからも難しい。もちろん、人権教育はすべての教育活動を通して行うべき学習であることから、「道徳」も他の教科同様、人権教育の推進を支える教科の一つであるが、年35回の授業数をこれまでのような人権学習を行う時間として扱うことは出来ない。

これらの状況から、今まで取り組んできた部落問題学習を見直し、これまでよりも時間的制限のある中で、部落問題への取組も含め総合的な人権教育を推進するために、本校の人権学習をどのような取組にするべきか検討をしたい。

3 研究（実践）の方法

今年度の人権学習を、各学年1～2つの個別人権課題に絞って行い、「総合的な学習の時間」の時数（1年50時間、2・3年70時間）以内で実施できるよう計画する。

そして、各学年の活動には、「ゲストティーチャーによる講演会」は実施する。今まで本校では、「大島青松園」への訪問などの校外活動や体験学習を実施してきた。しかし、コロナ禍のために本年度は実施できないが、感染拡大への対策を講じながら「ゲストティーチャーによる講演会」を行い、差別の現実から学ぶ場面を出来る範囲で設定し、深く学ぶきっかけを持た

せたい。このねらいに迫れたかは、生徒の感想などから検討する。

さらに、各学年で深まった学習を、学年を超えて共有できるように、人権劇のテーマの精選や人権問題意見発表会の開催時期の検討などを行い、学年を超えた意見交換を行える機会を設定する。自主的・実践的な態度を身につける機会として活用できたか、生徒や教職員へのアンケートから検証する。

4 結果と考察

(1) 各学年の取組

各学年の個別人権課題を、第1学年は「災害時の人権」、第2学年は「ハンセン病患者」、第3学年は「同和問題」として取り組んだ。個別人権課題を決め、例年より時間数を削減するように計画した。初めての取組となる学年もあり、試行錯誤を繰り返しながらの実施であったため、時間数の削減には至らなかった。しかし、今年度の取組が今後の骨格となるものとなった。次年度以降、時間数の削減と内容の充実をめざしたい。

また、各学年のゲストティーチャーによる講演会は、生徒の感想からもよい刺激を与えたといえる。次年度も今年度のゲストティーチャーとのつながりを継続していきたいと考えている。



1年ゲストティーチャー鳴門教育大谷村千絵准教授による講演会「新型コロナウイルスと人権問題」の様子↑

生徒の感想→

特に身近に感じる新型コロナウイルス。そんな今だからこそ、人権について学ぶべきだということが、とても伝わってくる講演でした。谷村先生のお話には、とても心を動かされ、今一度人権についてもっと考えてみようという気持ちになりました。他人事を自分事にして考えることや、何よりも想像力が大切だということを教わりました。先生がおっしゃったように、心理的距離と物理的距離を分けることの「賢さ」というのを、今私たちは学ぶべきだと考えます。「物理的に離れなくてはならないこの状況で、みんなの心まで離れてしまっただけではどうにもならない。」「今自分に何ができるのか。誰かのために何ができるのか。」そんなことをずっと頭に入れておくことも大切だと知りました。

(2) 人権劇

人権劇は、例年、吉野祭（文化祭）でコンプライアンス委員会が公演してきた。しかし、今年度はコロナ禍での実施となったため、ビデオで撮影したものを上映した。今年度は、「いじめ防止宣言」作成と平行して行い、いじめを題材にした人権劇を作成した。作品は、いじめを指摘した級長が孤立し、いじめられていた生徒は不登校になる。そのような状況の中で「私たちの学級はどうして自分らしくいられない人がいるのか、違いを認められないのか」と級長が訴えるシーンで終わる15分程度のビデオである。上映後、2名の生徒が演じてみての感想を述べ、3名の生徒が人権劇を見ての感想を発表した。映像で見ることで、より実感として捉えることができ、



真剣に考える時間となった。教職員からのアンケートでも、例年よりわかりやすく、生徒が真剣に考えていたという意見が多かった。感想を述べ合う時間が十分にとれなかったことが課題である。次年度は吉野祭での上映がよいかなどを検討すべきであると感じている。

(3) 人権意見発表会・人権集会

11月11日(水)の5・6時間目を利用して、「人権意見発表会・人権集会」を実施した。例年は三好地区人権意見発表会審査会への出場生徒選出のために7月初めに実施していた。しかし、人権作文の作成やその作文を学級や学校全体の場で発表すること、さらにそれらの意見を聴いて自分の考えを深め、人権集会(意見交換会)で発表することは、人権問題解決への実践力につながると考え、今年度は各学年の個人権課題の学習を終え、学習が深まった11月に実施した。初めに、各学年の取り組みについて、コンプライアンス委員がスライドを用いて発表した。その後、各学級代表である6名が意見発表を行い、その発表を受け、全生徒による人権集会を行った。各学年の取り組みを初めに発表することで、他学年の取り組みを知り、振り返りや今後の学習への思いを抱くことができた。また、各学級代表の発表の内容も理解しやすくなり、ある程度の共通理解ができた状況で、意見交換会を行えた。そのため、人権集会では、今までの人権学習で感じたことや今後実践していきたいことなどを、どの学年の生徒も積極的に発表し、40分間、意見が途切れることがなかった。ただ、人権集会での進行をコンプライアンス委員が行ったが、意見を整理したり集約したりすることがうまくできず、その場で各学年の学習成果を集め、より深められる集会にはできていない。今後、人権集会をよりよいものにするためには、どのような準備や指導が必要かが課題である。



5 おわりに

コロナ禍での取組で、昨年度末の計画通りには実施できなかったが、個人権課題を1つに絞っても、人権学習を通して自分の中の差別心に気づき、自分事として人権問題に取り組むことの重要性を実感を伴って学ぶことができた。また、発達段階に応じた各学年の取組と全体の取組の相乗効果により、短い期間の集中的な活動でも教育的効果は大きくなることがわかった。また、1・2年の取組を経て、同和問題学習を3年生で行うことで、部落問題への取組が薄まることもないのではないかと感じた。さらに、授業研究会などで教職員間で「娘の遺してくれたもの」など、今後も授業で取り上げていくべき部落問題の教材の価値についても共有できた。教職員全員で授業研究会などを行うことで、教職員の同和問題への取組も薄まることはないと感じた。次年度、今年度の取組をさらに精選し、生徒にとってよりよい三好中学校の人権教育を創造していきたいと考えている。

参考文献：令和2年度三好郡・市人権教育研究発表研究紀要

研究主題

主体的に学習に取り組む態度の育成を目指して ～数学科における学び合いの授業を通して～

三野中学校 教諭 入交 理子

1 はじめに

本校は117名の小規模校である。三好市の中では飛び地となっているが、吉野川に沿って田園風景が続くのどかな自然環境に恵まれた地域である。生徒たちは、明るく素直で礼儀正しく、学習や部活動、学校行事に一生懸命取り組んでいる。本校の教育目標である「知・徳・体の調和がとれ、社会の変化に対応し、たくましさとしなやかさを備えた人間力の育成」をめざし、1)心のこもった挨拶ができる生徒の育成、2)無言で心を込めて清掃活動ができる生徒の育成、3)学習意欲を高め、家庭学習にしっかり取り組める生徒の育成、4)部活動を通じて健全な心身の成長ができる生徒の育成を重点目標として掲げ、教職員が一丸となって、教育実践に取り組んでいる。

2 研究の目的

平成29年改訂の中学校学習指導要領では、育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で捉えることとなった。それに伴い、観点別学習状況の評価の観点も現行の4観点（関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解）から3観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）へと整理される。これらの資質・能力の育成に向けて、アクティブ・ラーニングの3つの視点（主体的・対話的で深い学び）を取り入れた学び合いの授業の実践を図ろうと考えた。

本校の2年生は、明るく素直で性別に関係なく互いに協力ができ、様々な活動にも意欲的に取り組むことができる。ペアやグループで話し合いを行う際にも、スムーズに行動に移すこともできる。また、数学の授業にも積極的に参加し、自主勉強として繰り返し問題を解くなど、自主的に学習に励む生徒もみられる。その反面、定期テストや実力テストになると思うように点数に結びつかなかったり、学習内容が進むにつれ点数に伸び悩んだり、数学へ苦手意識をもつ生徒も増えてくる。そのような生徒も、学び合いの授業を通して、学びに向かう力の育成と共に基礎的な知識や理解の定着を図りたい。

3 研究の方法

(1) 生徒の思考を引き出す板書の工夫

① 踏切効果でメリハリのある板書の構成

警戒色と呼ばれ、人の注目を集めやすい黒（黒板）と黄色（チョーク）を組み合わせ、重要な部分に黄色を使い、目立たせる「踏切効果」を利用する。学期中にも何回か生徒にも言っておくことで、意識して板書を見るようになり、生徒のノートやワークシートにも影響が表れると予想される。

② 授業内容以外の説明で円滑な学習につなげる

板書に後ほど書き加える際には、「後で書き加えることがあるから、2行ほど空けておいて」とあらかじめ指示を出す。また、ノートに図や計算過程を書くときにも、大きさやどれくらいのスペースを空けるか、書く位置などもあらかじめ伝える。生徒たちはノート

を取りやすくなり、考えることにも集中ができる。

③ 小さな気遣いで聞き手の意欲を変える

板書を消す際には、当たり前に行っていることかもしれないが、生徒へ確認をとる。一生懸命に書いているとき、前触れもなく消されると喪失感を感じる生徒もいる。また、黒板の対角線上になる見えづらそうな生徒に黒板が見えるか確認をする。

(2) 習熟度の違いを利用

① ヘルプティーチャーの設置

人によって理解に至るまでの時間は同じではない。だからこそ、その個人差を利用して交流活動を行う。教科書の問いを解かせる際に、早く解けた生徒は、教員が答え合わせをし、正答した生徒はヘルプティーチャーとなる。まだ、解答が終わった生徒や悩んでいる生徒のもとに行き、答え合わせや解き方の説明をする。もちろん生徒同士では解決できずに困窮している場面や勘違いをしている場合は、教師が入り解説をする。

② グループ学習を利用

特に2年生の証明の単元は、個人で考えること、証明を記述することもなかなか難しい。そこで最初は、今までの既習事項を整理し、証明に必要な条件や証明を書く手順などをグループで共通理解を図る。ここで大事なことは、わからなければ聞き返すことと、説明が不十分ならサポートし合うことである。これにより互いに要点を確認でき、苦手な生徒の理解にもつながる。グループで、証明に必要な条件がまとまったら、教師が確認し、グループで証明を作成する。習熟度の違いがあっても、互いに確認し合うことで、全員が証明を書き上げることができる。

4 結果と考察

(1) 生徒の思考を引き出す板書の工夫

ノートやワークシートにも色使いを工夫して記入したり、鉛筆単色だけでまとめていた生徒も適宜赤ペンなどを利用してまとめたりする生徒も増えた。中にはノートにまとめた公式などを再度、自主勉強にまとめ直しをする生徒も出てきている。また、気遣いで生徒の反応を見る機会が増えたためか、授業中に口頭で質問をした際にも、返答が返ってきたり、発表をしたりする生徒の数も増えた。

(2) 習熟度の違いを利用

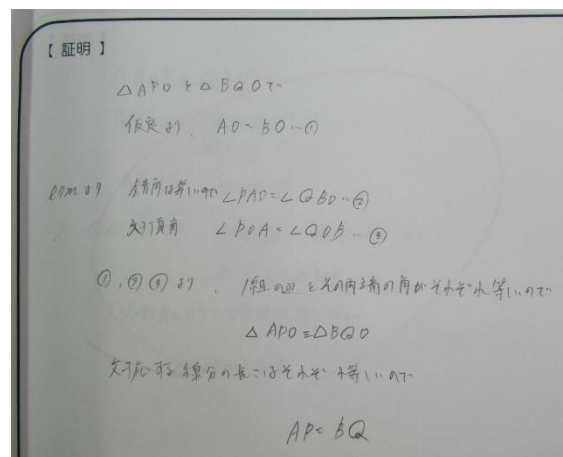
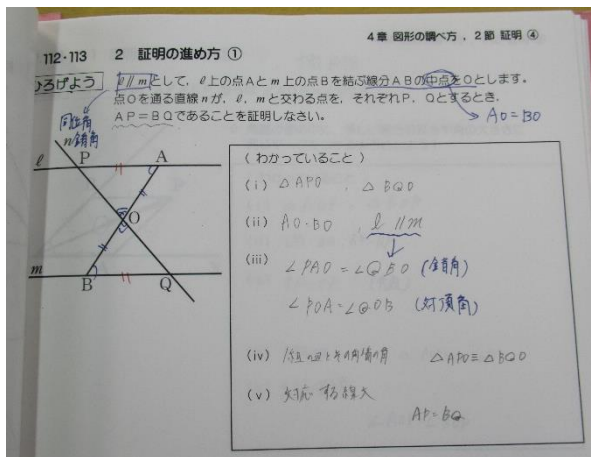
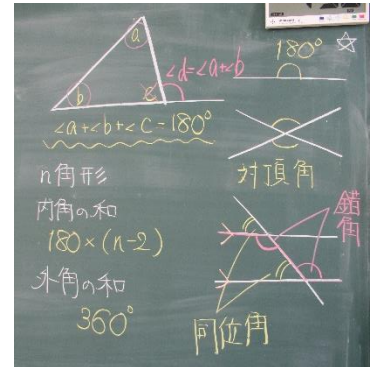
① ヘルプティーチャーの設置

はじめは、ヘルプティーチャーになった生徒も解答途中や誤答をしている生徒に対して、正答だけを伝えてしまうケースも見られた。しかし徐々に、活動になれてくると、解法を丁寧に説明するようになった。習熟の早い生徒も他の生徒に解説をすることで、自分の考えを整理することができた。また、自分以外の生徒の意見を知ること、多様な考え方や解法に触れることができた。そのため、実力テストなどでも安定した点数に繋がる生徒や記述問題で要点を押さえた説明ができる生徒もみられた。また、数学を苦手としている生徒も、自らヘルプティーチャーを呼び、解説を求めることも増えたり、自分の力で解いたりする姿も多くなった。また、定期テストや実力テストでも、基礎基本の問題の正答率があがった生徒も

見られた。

② グループ学習を利用

証明の単元に入るころには、ヘルプティーチャーが板につき、自然と数学が苦手な生徒をサポートすることができるようになった。グループでの確認をはさむことになるので、自信をもって発言ができたり、考えが整理され、説得力のある意見にもなったりした。また、証明をするときは、今までの既習事項を板書にまとめ、それを参考にしながら、証明の進め方（わかっていること）を整理するだけでなく、問題からわかること（共通な線分や角など）もじっくり見つけ出すこともできた。自然と、ヘルプティーチャーになった生徒は、数学が苦手な生徒の考えをじっくり聞いて、理解を促そうとする姿勢も多々見られた。



6 おわりに

実施する前は、数学が苦手な生徒は解法が分からないまま手が止まり、早く解けた生徒は手持無沙汰に時間を費やす姿を目にしていた。しかし、学び合いの場ができたことで、授業時だけに限らず、休み時間にも解法を確認したり、質問をし合ったりする姿も見られるようになった。生徒からも、「教えることで自分の考えが整理できた」「友達に気軽に質問できるし、ゆっくり説明してくれるから理解できたように思う」などの声も出ている。しかし、様々な学び合いの授業だけでなく、生徒が活発に活動できるような発問や言葉かけの工夫も必要である。また、確かな学力の定着の面では、まだまだ課題も残っている。計算の問題を反復したり、小テストを実施したりするなど、今後も研究を重ね、生徒たちの力を伸ばす授業の改善をしていきたい。

7 参考文献

- ・「2. 新しい学習指導要領等が目指す姿」文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm

- ・「教育科学 数学教育 2019. 7」明治図書
- ・「教育科学 数学教育 2019. 9」明治図書
- ・「教育科学 数学教育 2020. 6」明治図書
- ・「教育科学 数学教育 2020. 8」明治図書
- ・「教育科学 数学教育 2020. 11」明治図書

令和2年度 教育研修・研究事業報告

1 研究主題

『変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成』

2 事業

(1) 調査研究

- ア 教育課程の研究
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 地域の教育力を生かした教育活動の研究
- オ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- カ 各種研究会への参加と研究物の収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

(2) 各種研究会及び研修会の開催・共催

- ア 教育研究推進協議会・教育研究所協力委員会
第1回 6月 2日(火), 第2回(コロナウイルス感染症のため中止)
- イ 情報教育研修会(小教研情報教育部会と共催)
夏季研修会 (コロナウイルス感染症のため中止)
10月20日(火) コンピュータ作品審査等(三好教育センター)
- ウ 複式教育研修会(小教研へき地・複式部会と共催)
8月19日(水) 現場研修会(榎生小学校)
- エ 人権教育研究会(三好郡市学校人権教育研究大会後援)
文書発表 就学前分科会(白地幼稚園)
9月30日(水), 10月 6日(火), 20日(火) 小学校分科会(白地小学校)
10月21日(水) 中学校分科会(三好中学校)
文書発表 高等学校・特別支援学校分科会(徳島県立池田高等学校辻校)
- オ 新任管理職研修 参加者 11名
6月3日(水) 「管理職の心得」「学校事務について」 講師 竹内教育長他1名
- カ 学校運営研修会(教頭・中堅教員研修会) 参加者26名
開催日と講師
6月18日(木) 講義1 田岡 茂樹 (三好教育研究所長)
25日(木) 講義2 小谷 千恵 (スクールサポートスタッフ)
7月 2日(木) 講義3 中上 斉 (池田中学校長)
9日(木) 講義4 川原 克仁 (三野中学校長)
14日(火) 講義5 野口 幸司 (徳島新聞NIEコーディネーター)
7月21日(火) 講義6 伊丹 賢治 (池田小学校長)
22日(水) 講義7 // オ～カ「三好教育振興協議会」との連携による事業

(3) 研究委嘱, 研究協力校(園)への指導・助成

- ア 研究発表校
吾橋小学校・三好教育研究所
- イ 研究協力校・園(令和3年度発表校)

三縄幼稚園・辻小学校

ウ 委嘱研究員

幼稚園	1区	加茂幼稚園	宮成 典子	教諭
小学校	1区	三庄小学校	筆本 晴香	教諭
	2区	芝生小学校	徳永 直	教諭
	3区	箸蔵小学校	高田 寛子	養護教諭
	4区	東祖谷小学校	中岡 加代子	指導教諭
中学校	1区	三好中学校	大田 悦彰	教諭
	2区	三野中学校	入交 理子	教諭

(4) 各研究会，団体等との協力

ア 三好教育会

イ 三好郡・市小学校教育研究会，三好郡・市中学校教育研究会

ウ 三好郡・市学校人権教育研究協議会

エ 三好郡・市各幼稚園・小学校・中学校

オ 中・四国教育研究所連盟

カ その他教育関係諸機関

3 研究成果の発表及びその普及

(1) 三好教育研究発表会（コロナウイルス感染症のため中止）

日時 令和2年 8月20日（木） 12：50～16：40

会場 三好市池田総合体育館 サブアリーナ

○研究発表（文書にて発表）

・吾橋小学校 研究主題

豊かな体験活動から学びを拓き，深める吾橋教育

～へき地・複式・小規模校の特性を生かして～

発表者 井上 清隆 教頭

・三好教育研究所 研究主題

表現リズム遊び・表現運動の指導の現状 ―調査から分かったこと，研修会で学んだこと―

発表者 中瀧 由紀 研究員

○講演（中止）

演題 「思春期のこどもへのかかわり方」

講師 中村 経子（のりこ）氏

（臨床心理士，スクールカウンセラー，兵庫県スーパーバイザー）

(2) 研究紀要（第61集）の発行と研究所報（第101号）の発行（CDによる）

各学校・園に配布，各研究機関に送付

(3) ホームページ等による広報活動

(4) 県内外教育研究所への「研究紀要・研究所報」の送付

(5) 研究員による研究成果のまとめと報告（県教育委員会へ提出）

(6) 三好教育振興協議会の事務

各種調査・整理，会議の運営など

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

幼稚園・小学校

年度	幼稚園	小学校				
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
H11	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫛生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫛生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	細川文男(櫛生小)
	横田嘉代子(昼間幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	松村直也(和田小)
	井上淳子(足代幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	細川文男(櫛生小)
5	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	田中敬子(上名小)	谷恒二(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小)	大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	志磨昭子(大和小)	大瀧和彦(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小)	大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	國金砂恵子(野呂内幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	大久保珠美(池田幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫛生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫛生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫛生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	濱本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	
27	真鍋友子(辻幼)	大西勇貴(加茂小)	藤川美香(西井川小)	新藤茂美(箸蔵小)	長岡鷹太(吾橋小)	
28	加藤由美(辻幼)	木村麻紀子(三庄小)	玉木恵子(芝生小)	上浦大輔(池田小)	瀧下光子(政友小)	
29	岡尾千恵(山城幼)	岡田直人(足代小)	岡慎太郎(辻小)	松本美穂(三縄小)	竹内友梨(山城小)	
30	山本真由美(白地幼)	曾我部悦嗣(昼間小)	大西利江子(王地小)	中川法子(白地小)	岩崎順子(櫛生小)	
R1	藤川孝子(足代幼)	鮎川美加(加茂小)	伊丹智子(西井川小)	前田泉季(馬路小)	喜多芳恵(山城小)	
2	宮成典子(加茂幼)	筆本晴香(三庄小)	徳永直(芝生小)	高田寛子(箸蔵小)	中岡加代子(東祖谷小)	

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

中学校

年度	中 学 校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
H1	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	鳥本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友真弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネヒー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友真弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			
27			芳川未弥(西祖谷中)	岡田祐佳(東祖谷中)	
28	石崎雄一(三好中)	石橋洋平(三野中)			
29			平尾昌彦(池田中)	西昭弘(山城中)	
30	天竹雄紀(三加茂中)	三好佐知(井川中)			
R1			谷口真美(西祖谷中)	藤村美咲(東祖谷中)	
2	大田悦彰(三好中)	入交理子(三野中)			